土曜ワイド

紙芝居の魅力さらに

「文化の会」20周年

代表・童心社会長　酒井　京子さんに聞く

紙芝居を愛する人、興味のある人、演じたい人など、さまざまな人が国境を越えて出会い、交流する「紙芝居文化の会」が20周年を迎えました。代表の酒井京子さん（童心社会長）に、紙芝居への思いを聞きました。（二宮亜里）

紙芝居舞台を使って「ロボット・カミイちびぞうのまき」を演じる酒井さん

―紙芝居の魅力は？

紙芝居は、表に絵、裏に脚本が書かれた何枚かの紙でできています。演じ手は、紙芝居を舞台に入れ、観客と肉声でコミュニケーションをとりながら演じます。

童心社の紙芝居を代表する『おおきく　おおきく　おおきくなあれ』（写真１）。紙芝居・絵本作家の、まついのりこさんの作品です。演じ手が「ちっちゃな　ちっちゃな　ぶたがいるよ。おおきく　なりたいんだって。みんなで　一、二の　三で『おおきく　おおきく　おおきくなあれ』って　いってみて」と呼びかけると、子どもたちは大喜びでいきいきと声を合わせてくれます。

心揺さぶる体験

かけ声に合わせて画面をぬくと、ブタやケーキが大きくなります。ぬくタイミング、ぬく速さでハラハラ、ドキドキ。心を揺さぶられる強烈な体験です。子どもの成長を願う「大きくなあれ」が同作のテーマ。演じ手と観客、観客同士の生のやりとりをとおして、作品の世界への共感が生まれるのが紙芝居です。その喜びがあるから、子どもたちは紙芝居が大好きなのだと思います。

写真１「おおきく　おおきく　おおきくなあれ」

写真２「おかあさんのはなし」（刊行時は「お母さんの話」）

写真３「あひるのおうさま」

ハラハラ、ドキドキ　生のやりとりに共感

―紙芝居の歴史と、「紙芝居文化の会」の歩みについて教えてください

紙芝居は1930年ごろ、日本で生まれました。テレビのない時代、子どもたちは紙芝居に夢中になりました。しかし、31年の「満州事変」から、日本は中国、アジアへの侵略戦争を開始。検閲を受けた国策紙芝居が戦意高揚への共感を高める道具として悪用されました。負の歴史です。

戦後、戦争に協力した反省から、平和で人間の命を大切にし、子どもを愛することを原点にした紙芝居づくりが始まりました。現在も童心社から発売されている『おかあさんのはなし』（写真２）脚本・稲庭桂子　絵・岩崎ちひろ）。この作品は「教育紙芝居研究会」が刊行したものです。同会の活動を引き継ぎ、紙芝居の出版社として童心社が57年に創立されました。

世界55カ国にも

私が69年に入社して、『おしいれのぼうけん』（古田足日、田畑精一・作）、「14ひきのシリーズ」（いわむらかずお・作）などの編集に携わってきた91年のある日のこと、まついさんから電話がかかってきました。

「今、ベトナムに来ているの。出版社の社長さんが『紙芝居のつくり方を教えてほしい。ベトナムで広めたい』と言っているから、童心社のみんなと一緒に来てくれないかしら？」と。そこからベトナムでの紙芝居交流が始まりました。

講座をやる中で「紙芝居をもっと理論化する必要がある」と感じ、勉強会を立ち上げました。まついさんは紙芝居初の理論書『紙芝居―共感のよろこび』をまとめました。図書館の司書や地域で文庫活動をしている人なども集まってきて2001年、「紙芝居文化の会」が誕生しました。

今や世界55カ国も含め800人以上の会員がいます。講座では紙芝居の演じ方、作品の選び方などについて、理論を土台に実践的に学べるように工夫しています。紙芝居を通して平和の大切さを伝え、人間の幸せのために演じる紙芝居の文化を発展させたいと思います。

写真４「たべられた　やまんば」

写真５「ころころ　じゃっぽーん」

写真６「三月十日のやくそく」（出版はすべて童心社）

―「紙芝居文化の会」のおすすめは？

観客参加型の代表は『おおきく　おおきく　おおきくなあれ』ですが、物語完結型にも優れた作品がいっぱいあります。会では「おすすめ紙芝居」として推薦しています。

『あひるのおうさま』（写真３）脚本・堀尾青史、絵・田島征三）。アヒルが横暴な王様を、仲間と一緒に退散させるフランス民話です。日本の民話『たべられた　やまんば』（写真４）脚本・松谷みよ子、絵・二俣英五郎）。松谷さんは紙芝居が大好きでした。劇的な展開が魅力です。

赤ちゃんから楽しめるのが『ころころ　じゃっぽーん』（写真５）脚本・絵　長野ヒデ子）。平和の大切さを考える『三月十日のやくそく』（写真６）脚本・早乙女勝元、絵・伊藤秀男）。優れた紙芝居の深いメッセージを受け取ってほしいと願っています。